

白雲臨書 風信帖 (13)



白雲先生と私

白雲先生書話が終わりました。臨書などは今暫く続けます。今年は白雲先生の生誕百年に当たりますので、先生の作品を高知市鏡にある「ギャラリー白雲」からお借りし、大阪市立美術館で展示公開して関西の皆さん方に見て頂きたいと計画しております。ご期待ください。

尚、書話をつづけた小欄は、教えを受けた皆さんに印象に残る思い出を書いて頂き、順次、紹介していきたいと考えています。
“人間川崎白雲”の彷彿とする一文をお寄せ頂ければ幸いです。

原稿の要領

1. 原稿依頼

(1) 白雲先生に教えを受けた方々

(2) 玄遠社常任理事以上

(3) 白雲先生ゆかりの方

2. 随筆 六〇〇字以内

又は、写真一葉と、説明文(百字程度)

(原稿の切は毎月10日)

〈本年度掲載月予定〉

5 横山小園 6 小伏竹村 7 川崎游子

8 小島白洲 9 山下皓映 10 泉 雪華

11 和田清香 12 佐藤雲溪 1 富岡宏岳

2 竹田尚堂 3 山内孝石 4 関本香園

白雲臨書 風信帖 (14)



父、白雲と娘の私

横山 久子

師匠と弟子そして親子。子供の頃に一年ばかり水嶋先生に手解きを受けたが、それ以外、父の他に書道の指導を受けた記憶はない。若いときは、書とは何か、どういう作品が良いかなど、書に関しての説教を毎日、食前、食後聞かされた。書活動では、書道芸術院展、毎日展へと出品を続けたが、手本一切なしの指導、苦しい作品制作の喘ぎであった。嫁いでは、私なりに主婦の立場を生かして臨書、作品作りに勤しんだ。父はわが家に立ち寄ったとき必ずそれらを見てくれ、批評してくれた。「お前は広くて浅い勉強しかしていないのに、作品となると小さい身体で大きなものを良く書くな。いいね」と。うれしくて、これでもか、これでもかと書きまくった。晩年母は病が進んだため、老人ホームのお世話になり、父は私方で生活を共にすることになった。書くことと母とを同時に遠くにした父の落ち込みはひどかった。鏡村で「ギヤラー白雲」の設立が進み、村長の山崎様から故郷での書活動のお誘いを受けたのは丁度その頃であった。父は鏡村に単身移住、季節の移ろい、古里の皆様の暖かいご厚情をうけながらギヤラーを中心に、書への情熱を燃え滾らせた。間もなく九十歳になろう頃の、心情を心に留めながら筆の飛躍に惜しみない情熱を込め、明るく、素朴に描かれた作品群。情熱は最後まで続いた。介護をしながら、父から受けた教訓はいつまでも忘れられない。

白雲臨書 風信帖 (15)



「偉人」川崎白雲先生

小伏 竹村

一九四六年（昭和二十一年）一月、私は兵隊から復員して、大阪第二師範学校（旧池田師範）一年に復帰した。

書道部に入りたいと思い、友人の故敷内君に相談、手近にあった大阪の書家「黒木栞石先生」の手本を三枚臨書して持参した。川崎梅村先生（当時は『梅村』）は私の半紙作品を見るや否や、「これ！字か？」、軍服姿の私は一瞬ムカッとしたが、「待てよ、このオッサン、陸士上がりの生意気な俺の小隊長に似てるなあ！」と思った一瞬、私の顔に笑いが走ったと思う。私の顔を上げしげと見ておられた梅村先生は、古ぼけた一冊の本をパラパラとめくり始めた。ピツタと止まったと思つたら、指差して「君、ここを書いといで」といつて私に背を向けられたが、なぜか大きく見えた。書道の教官室を出て、よくよく見ると「これなんじや！ 黒い紙に白い字が書いてあるで！」。これが王羲之の「楽毅論」であることが後でわかった。

一週間がたった。訳のわからんまま臨書した楽毅論を十枚持つて、再び梅村先生の研究室を訪ねた。「こんどアホぬかして、ただでおいへんど」と腹をくくりながら待った。先生「書道部入れたるわ、一緒に勉強しよ」「ああよかった」

それから一年、私と敷内君が先生に呼び出された。このころはもう梅村先生は得がたい大先生やと尊敬の念おおくころあたわずであった。

「敷内君は、細河におつて毎日、松の木を見るやろ、『松邑』という雅号をつけたる」

「小伏君は田舎に竹がたくさんあると、いうつとつたろう。『竹村』や」と。

感激している間もなく、梅村先生は高知師範へと帰っていかれた。

白雲臨書 風信帖

(16)



川崎 白雲 先生



繁吾郎と吾一

川崎 吾一

南河内郡河西村で吾一誕生。繁吾郎の「吾」と、はじめての男の子で、「一」とつけ、吾一と命名したとのこと。池田西畑在住の頃、やんちゃな私に頭から井戸水をかけたり、灸をすえたり。驥の為か。欲しかった遊び道具、輪廻しをかってもらおう。遊びに熱中し、どこかに忘れて帰る。夕方探してこいといわれ、泣く泣く探していく。物の大切さを教えられる。ある日登校中運搬用馬車にぶら下がり落下。顔色の悪い私を担当が当時池田師範勤務中の父に連絡。一言、こたないこたない。悪ふざげが人に迷惑をかけるので二度とするなと叱咤される。高知朝倉官舎在任の頃、仁淀川舟下りにて突然川に放り投げられる。二度三度。これより泳げるようになる。親の特訓が後の潜水に役立つ。又、四年生の頃から、幼稚園の看板「ゆめのくに」を書かされた。子どもらしくてよいからとのこと。続いて、般若心経を書けと言われ、泣く泣く書きあげた。母の見守る姿が今も残る。根気と集中力を養う為か。又ある日、材木店で大八車を借り、十六キロほどある梅ノ木まで薪をとり、母と三人で行く。往路すこし父を荷台にのせ、私が引いていく。道ゆく人々、ありや反対ぞねと。体力作りをさせられる。婦り、川口という所でニツキ水を買ってもらおう。旨かった。夜遅く官舎に帰る。姉久子が弟直和を子守しながら待っていた。思いう話はずきぬが、紙面上書ききれず、機会あらば又その時にでも。尚、梅ノ木は父の生まれ育ったところ。

吾一記



白雲臨書 風信帖

(17)



川崎 白雲 先生

夕空の星

小島 小汀

私と小島白洲との出会いは書道とはおおよそ関係なく、若者達の文学サークルでした。

丁度その頃下宿先が同じということで白洲を通して、岡田米峰先生、恩地春洋先生とも出会い二人の先生が私達の結婚の後押しをして下さいました。

二十一才で嫁いだ私はほどなく長男を身籠り、白洲から「書道を習うと胎教にいいからね。」といわれて、川崎白雲先生の門をくぐる事となりました。文学、音楽は少々かじつておりましたが、書道となると私には全く未知の世界でした。最初から「楽教論」の臨書をおそりました。

或る時先生が、「今日は遅くなつたから中野の駅まで送ろう。」と云われて先生のお伴をして駅まで行きましたが、その間どんな話をしたのか記憶にありません。ただ夕空に星がキラキラ輝いていた景色が心に残っています。

その後通信教育を受けていましたが、「自宅へ作品を持参すると、「これからは小島君に習いなさい。」と云われ門前の小僧のように見よう見まねの勉強が始まりました。その頃になると私も書道芸術院展に出品する様になりました。白雲先生の会では出品作品縮切までには門弟が先生のお宅に集まり作品の下見をする事が何回かありました。

最終選考の日私が作品を並べると白雲先生から「前回選んだ作品はどうした。」と尋ねられ私は「はい、家に置いてきました。」と答えると、「今から家へ取りに帰りなさい。」とのことで大急ぎで取りに帰りました。

その作品は白雲先生の教えで一度たつぷり墨をつけたら墨が枯れるまで書き進む。それから墨つぎをする。渴筆の所が竹書きの様にささくれ立った作品でした。その作品は芸術院展で特選をいただきました。その時は書作品を創るとはどういうことかと心に響くものがありました。先生からの尊い教えでした。今一度その時の気持に返り、これからの書作の糧にしたいと思います。



白雲臨書 風信帖

(18)



川崎 白雲 先生



墨磨りと「無私」の額

繩船 小渚

「墨を磨りに来い」の電話を頂いて私は、出向いていました。道場の大きい机の前に座ってお待ちしていました。

(奥のお部屋に何ったことはありません)
「十人目にやつと来た」とおっしゃる先生に

「私ははじめてです」と返事、

「あつ、そう」と、納得のご様子。

真ん中の磨滅した大きな硯に、暫時磨りつづけました。

筆に水を含めてしばらく、先生の前に置くと、

「俺、何か云ったか？」とおっしゃるので、

「いいえ、何もおっしゃいません」と答えると、「そうよなあ」と。

先生のおっしゃる前に行動したこと、不思議がられていました。

執筆中の筆先を眺めたり、書かれた作品を一枚ずつ、道場一ぱいに広げて乾かしたりされました。

ぐるぐる歩きまわったり、かすれの美しい作品を立ち止まって眺めたりしておられました。

やがて、

「好きなものを一枚持っておいで」とおっしゃったので、私は

「無私」をいただきました。

今も、額に入れて掲げてあります。

●小渚さんは、白雲先生が再上阪されて中野在住の頃(浪楠書法研究所)ご活躍の門人。

白雲臨書 風信帖

(19)



川崎 白雲 先生

川崎白雲先生 折々のおことば

泉 雪華

川崎白雲先生の思い出を書くようにとのことでございますので、何かお書きしないとけないのですが、先生のことをとてもえらい先生と思っておりますので、あまりおそばへ寄せていただいたことがないように思います。いつも雲の上においでになって、こちらの方を見ているものだとばかり思っております。他にもえらい先生方が大勢おいでになりましたので、その先生方を通じてしか先生のことをお聞きがすることはございませんでした。ですから思い出をといわれましてもあまりございません。

でもその時その時のお言葉は耳に残っております、時々思い出しております。先生は作品をごろんになりながら、よく筆と腕と紙が一致せんとあかんとおっしゃっていたようでして、何のことかよくわからずにおりましたのですが、近頃になりましたからやつとその三つの関係がなるほどそういうことかと思うようになりました。アメリカ旅行からお帰りになりました時は、書道の他に何かもう一つ勉強するようにと申されまして、何のことかわからずやむやにしております。そのまま過しておりましたら近頃になりました王子様が現れ出でまして、自分からそれを取り上げられたら何もないのを恐れておいででしたので、なるほどそういうことかと気がつきましたが時すでに遅し。王子もその後どうされたのか気になる所でございます。もう一つこれは一寸おもしろいお話と思いが聞かせていただきました。

先生が雀を捕えようと竹藪においでになりますと、雀は用心深いのですぐ逃げます。そこで先生は身動き一つせず竹藪の竹になられたそうでございます。そうしておいでになりますと雀は先生も竹だと思ったのでしようか、戻って来て先生は雀を捕えられたそうでございます。その後雀がどうなったのかは存じませんが、書の極意を語っておいでだったのでございませうか。お話し申し上げることなど何もないと思っておりますのに、書きはじめましたら出てくるわ出てくるわ一寸困っております。でも予定の紙数も過ぎておりますし、川崎白雲先生という大人物の中から何かをつかみ取るという作業は並大抵なことではないと思いが知らされてまいりました。竹藪の話は大好きでございます。取つときだったのでございますが、この際思い切つて蔵出しをさせていただきます。



白雲臨書 風信帖 (20)



川崎 白雲 先生



先生との思い出

和田 清香

昭和三十五年、第十三回書芸院展が二月十日、日本テレビに放映され、当時はまだテレビは珍しい時代、その年無鑑査二期目の私の作品が院賞をいただきその中であつたのを、上京しておられた先生がごらんになつて、帰りにわざわざテレビ局へ出向かれてそのフィルムを買つてきたと私に下さった。当時8耗のフィルムは今見ることはありませんが、直径十三釐のアルミ缶に入つて、私の手許に残っている。未知数の若い弟子のためにそこまでしていただいた先生の優しさは、私には忘れる事の出来ない青春の一ページです。しかし書の研究については、よく叱られた。どこに目がついているなんて、でも結果がでると私自身は勿論先生もとてもよこんで下さった。それを励みに続けてこられたと思う。又健康維持の為、よくハイキングに誘われた。金剛山雪中登山、暗がり峠越生駒山上、等々。



貰つてきていただいたフィルムの缶

次の写真は、当時の阪和線の砂川へわらび取りに出掛けた時のもの。今の砂川は知るよりもありませんが、当時の砂川は一面野っ原で、わらび、スカンボがいくらでも取れた。お昼は飯盒炊飯でめざしを焼いて食べた。おいしかった。このやり方も、先生が全部指導して下さいました。もう二度と戻る事の出来ない、大切な一時でした。



昭和31年4月22日 砂川わらびとり
奥さま、日野さん、先生、私、磯間さん(途中で金巻)
奥さま、日野さん、先生、私、磯間さん(途中で金巻)
奥さま、日野さん、先生、私、磯間さん(途中で金巻)

白雲臨書 風信帖 (21)

川崎 白雲 先生



先生との思い出

佐藤 雲溪

継続は力なり、昭和三十四年白雲先生に入門して以来何故か先生にはよく声をかけて頂き、その年の暮れに芸術院展に出品してみないかとお手本を頂きました。その研究会で皆さんの立派な作品に驚き、その年の出品を断念したものです。翌年同じ文句で再度挑戦で準特を頂き、先生もよくやったと喜んで下さいました。

また、先生はよく足を駆使してか、百貨店の通路や建物の渡り廊下等のギャラリイを探して来ては門人達と展覧会をしたものです。

そんな或日京都展のこと、私は仕事の関係で展示時間に少し遅れた時、恩地先生のお口添えもあつたが、どうしても展示してもらえなかつた。そんな厳しい妥協を許さない先生でもあつた。それでも続けられたのは無知な私にも偉大な先生であると感じられたからだと思います。

新しいことを常に、と先生は率先して、長唄と仕舞を習われ、たしか舞台の上に日立のマークがあつたから日立ホールだと思ふが、プロの長唄の人達と発表され、仕舞も舞られた。丁度その頃、町先生をお迎えして、歓迎の夕べを開き、その時の仕舞がこの写真です。



左側は一九九七年一月二度目に皆さんと白雲ギャラリイに行った時の写真です。先生はお年を取られた様に思いましたが、皆さんの顔を見るとそれはとても嬉しそうでした。

沢山の思い出から省いて行つたから文章にならず、失礼です。



白雲臨書 風信帖 (22)



川崎 白雲 先生



白雲先生との出会いと思いつくまま

富岡 宏岳

昭和四十年前後と思いますが、岩井芳岳先生（独立の山崎大抱先生に属された方）に教えを受け、筆友会に入会、競書に出品しておりました。当時昇段試験は川崎先生の家で行っておりました。その時先生から、第三期・指導者養成講習会があるので来ないか、と言われ参加させて頂きました。

書にはきびしい先生でした。又時間も厳しく、指定の時間に遅れたら入れてくれませんでした。講習は、六時—九時まで、三時間正座のままでした。宿題の多いのにはびっくりしました。書道芸術院、毎日展外、阪神展、京都展、忙しくなりました。先生は真の芸術家で、新しい事には何でも研究され、新書会も発足されておられました。又一時期、信貴山の一部を開拓され、さつまいも等作り、谷川の水を汲んで仙人のような生活をされておられました。ある日考えるところがあって、奥様と全国を旅されました。時々帰って来られ、臨書の手本を書いて講習をされました。

四・五年の旅を終え、田辺に居を置き静かに生活しておられ、書話会等され、よい勉強になりました。一番心を打ったお話をします。

「字を書くのは、筆使いは好きな様に書いてもよいが、線と言うものは点の集まりで、縦ゆれと、横ゆれを、同時に書かないと強い線は出ないよ。」と言われ、びっくりしました。

今だに、ただの線しか書けません。

又、「書は自分以上のものは書けない。うんと勉強して知識を養い、心を磨かないと、いい作品は書けないよ。」これは難題ですね。

世の中、好きな様に楽しく生きられたら幸せです。前後ばらばらの文で失礼します。

白雲臨書 風信帖 (23)



川崎 白雲 先生



全てお見通し

竹田 尚堂

初学の頃、時々奥様から「墨を磨ってほしいと申しますけれど、都合いかがですらう」と電話をいただいた。何うと大概お出掛けで、先生の大きな赤い座布団に正座して墨を磨る。暫くすると「磨れたかね」と戻って来られ、「臨書するから見てゆけ」と言っ下さる。生き物かの様に躍る筆先、命を得て躍り出る文字。「一週間貸してやる。形も線もそっくりに書いてこい」と。一週間後、恐る恐る差出す。二、三ヶ所指摘され、「どんどん書くことやね」と。朱が入ることはない。

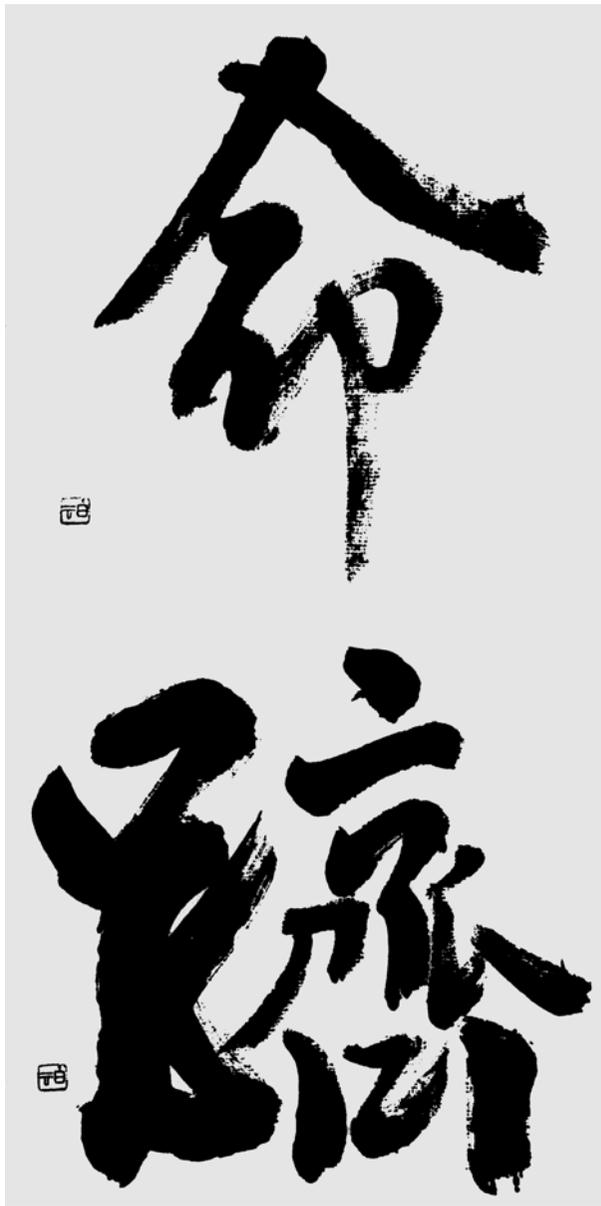
鍾繇の『力命表』を見て頂いた時、「一寸分かつてきたか」と言ってもらった。嬉しかった。『力命表』は特別の存在になった。いつの時も「貸す」と言われ、「やるから稽古しておけ」とは言われぬ。欲しいと思っていた。ずっとずっと後になって、はたと気付いた。期限があるから兎にも角にも書いた。少しは上達したと思ってもらえるようにと書いた。もし貰っいたら、後生大事に仕舞い込んで書かなかつたらう。先生は全てお見通しで、この様な指導をして下さったに違いない。

そんなある時、奥様が「主人の若い頃に一寸似てるところがあるのよ」と。嬉しくなっ「どんなところですか」。にこにこしながら「融通の利かないところ」と。僕は思わす「わあ、先生みたいに頑固になるんですか」。大笑いになった。先生も「あほ言え」と笑っおられた。四十年前の一幕である。

白雲臨書 風信帖 (24)



川崎 白雲 先生



目から鱗の講習

山内 孝石

昭和四十三年春、玄遠社参与の富岡宏岳先生に紹介して頂き、第四回書道指導者養成講習会入会承諾のご返事を奥様から頂き入門。講習は四十三年六月〜四十五年四月、午後六時〜九時迄。日本、中国古来の法帖の解説と筆遣いの技法を基本から、履修した法帖は十九冊。その他ペン習字、手紙、新書芸、書道史、教授法等多岐に及び、宿題は毎回五十枚大変でした。

筆遣いの一例を挙げると、九成宮は筆を直にして突く様に。孔子廟堂は進む方向に筆を少し傾け引く様に。と云ったご指導でした。それ迄法帖も知らず只我流で書いていた私にはすべてが「目から鱗」でした。

又先生は貫名にかけては日本で私が一番だと云っておられたので、私も夢中で臨書したものです。だが木簡なんかは思う様に書けなくて先生から何をもたもたしてと後ろから手を持って頂いた事。又かなの講義の時固まった小筆を口で噛み唇を黒くしながら手本を書いて下さった事、又第二十一回毎日展に初出品の折は印泥をまだ持っていない私に先生が一回二〇〇円やと笑顔で貸して下さった事等、この稿を書くに当たって四十一年の歳月を経た今、色々な事が走馬燈の様に思い出され感慨一入です。既に黄泉に旅立たれた先輩を始め、旧梅村社や玄遠社の先生方に支えて頂いたお蔭で継続してこれたものと感謝しております。写真は講習終了時に頂いた認定証です。

